

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 22 日現在

機関番号：42608

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2014

課題番号：23720046

研究課題名(和文) イングランド啓蒙における「保守派」女性の政治言説に関する思想史的研究

研究課題名(英文) The English Enlightenment and 'Conservative' Women Writers: An Intellectual History

研究代表者

梅垣 千尋 (UMEGAKI, CHIHIRO)

青山学院女子短期大学・現代教養学科・准教授

研究者番号：40413059

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、18世紀末のイングランドで「保守派」の立場から政治論を発表した女性思想家の存在を掘り起こし、その政治言説の分析を通じて、イングランドにおける「保守的啓蒙」の広がりとその内部の緊張を明らかにした。具体的には、フランス革命の勃発を契機として、1790年から1805年ごろにかけて、急進派にたいする批判を展開した女性著述家たちの思想を分析対象とし、彼女たちの政治的著作の特徴を検討した。

研究成果の概要(英文)：Focusing on late-eighteenth century British female intellectuals who joined the French Revolution Debate and articulated their own political views from the 'conservative' standpoint, this research examined the way in which the 'conservative Enlightenment' provided women writers with new opportunities to make their voice heard in the public sphere.

研究分野：思想史

キーワード：女性 政治 保守主義 啓蒙 イギリス フランス革命

1. 研究開始当初の背景

(1) 思想史家の J・G・A・ポーコックは、かつて「保守的啓蒙」という言葉を用いて 18 世紀のイングランド啓蒙を特徴づけた。たしかに名誉革命体制下で展開したイングランド啓蒙には、宗教的権威との親和性や社会秩序の歴史性の強調といった、独自の「保守的」性格が見られる。このような概念化以降、従来の思想史研究ではあまりかえりみられなかった著作を利用して、イングランド啓蒙における保守的思潮の裾野の広さを明らかにする研究が相次いで発表されている。

(2) 他方、女性史やジェンダー史の進展にともない、思想史研究においても女性の思想的貢献、あるいは表象としてのジェンダーの機構を明らかにする研究潮流が生まれつつある。女性の思想を明らかにすることは、単に歴史のなかに埋もれていた存在に光を当てるだけにはとどまらず、男性思想家に重心が置かれてきた従来の思想史研究のなかで見過ごされてきた論点を新たに浮かび上がらせることができるものと期待されている。

2. 研究の目的

(1) 本研究は、18 世紀末のイングランドで「保守派」の立場から政治論を発表した女性思想家の存在を掘り起こし、その政治言説の分析を通じて、イングランドにおける「保守的啓蒙」の広がりとその内部の緊張を明らかにすることを目的とする。

(2) 具体的には、フランス革命の勃発を契機として、1790 年から 1805 年ごろにかけて、急進派にたいする批判を展開した女性著述家たちの思想を分析対象とする。彼女たちの政治的著作の特徴とその執筆過程の検討をつうじて、イングランド啓蒙の保守的系譜がどのように女性の思想形成を促し、それにより啓蒙そのものがどのように変容したのか

を考察する。

3. 研究の方法

(1) 「保守的啓蒙」についての基礎的調査として、研究史の整理をおこなった。18 世紀イギリスにおける保守主義の諸系譜をマッピングするとともに、フランス革命論争における保守派言説の変容をめぐる研究史上の論点を析出した。

(2) 具体的対象として、とくに急進派の代表的な女性思想家であるメアリ・ウルストンクラフトにたいして敵対的姿勢ないし距離を置く姿勢を示した女性たち(ハナ・モア、アナ・リティシア・バーボールド、エリザベス・ハミルトン)を取り上げ、彼女たちの一次史料の渉獵をおこなった。

(3) 女性の思想史的貢献を論じる際の方法論の確立をはかるため、社会学・歴史学・哲学・文学など隣接分野の文献を参照しつつ、女性がみずからの「思想」を「公論」の場に提示する上での主体形成のあり方についての理論的な検討を進めた。

4. 研究成果

(1) 急進派の代表的な女性思想家であるウルストンクラフトにたいして敵対的姿勢ないし距離を置く姿勢を示した女性たちとして、次の対象を取り上げ、その思想的特徴について考察をおこなった。

ハナ・モアは、急進派の形而上学的議論を忌避しながらも、騎士道精神を賛美したエドモント・パークとも距離を置き、国教会内部の改革を推進する福音主義派として、キリスト教と商業に根ざした文明史を提示した。モアのケースからは、明確な男女の役割区分を唱道する女性が、宗教的ないし政治的権威を背にして社会に広く訴えようとするからこ

そ、公論の場に出ることが可能になるという「保守派」女性独自のパラドクスが明らかとなった。

アナ・レティシア・バーボールドは、非国教徒という出自から政治的には革新的な立場をとったが、男女の平等という主張には懐疑的であった。とくにバーボールドが自身としては優れた文才を発揮して「学識ある女性」と謳われながらも、女性のためのアカデミックな教育機関の設立に一貫して否定的な立場をとっていたことに注目し、バーボールド独自の「中庸」の精神を重んじる学問観、そして人間の「偏見」をかたちづくる場として家庭をとらえる現実主義的な教育観の特徴を明らかにした。

エリザベス・ハミルトンは、スコットランド常識哲学の影響のもと、「幼児教育」の重要性を論じ、子どもたちの教育を担う女性の独自の貢献のあり方を追求するなかで、女性と男性の同一性を唱える主張を批判した。しかし一見すると保守的にみえるハミルトンの主張には、1790年代のフランス革命論争という激しい党派対立のあり方を相対化するという狙いがあり、党派対立の克服という明確な問題意識をもって、男性をその中心的な担い手とする学問世界を根底から問い直していたことを明らかにした。

(2) 以上のような女性を対象にした思想史研究をすすめるなかで、方法論的な検討を深める必要性も明らかとなった。もっぱら大学など高度な教育機関で思考や叙述の訓練を受けた男性思想家を対象としてきた従来の思想史研究においては、その思想の体系性、主張の包括性、先行する議論にたいする独自性などが評価されてきたが、男性とは異なる教育環境のもとに置かれた女性思想家を対象とする場合には、私的領域での経験や「公

論」参加にいたるまでの個人的契機など、「生活者」としての独自の思想形成のあり方を丁寧に見ていく必要がある。こうした思想史上の新たな方法論的課題については、より長期的に共同研究の可能性も探りつつ取り組むことが今後の展望としてあげられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

梅垣千尋、エリザベス・ハミルトンの教育論 党派対立の時代の学問世界と女性、青山学院女子短期大学総合文化研究所年報、査読無、22号、2014、3-30、

<http://www.agulin.aoyama.ac.jp/opac/repository/1000/17044/>

梅垣千尋、オースティンが読んだ書物のなかのウルストンクラフト 歴史研究の立場から、ジェイン・オースティン研究、査読有、7号、2013、110-122

梅垣千尋、アナ・バーボールドの女子教育論 学問・女性・家庭、青山学院女子短期大学総合文化研究所年報、査読無、19号、2011、87-110、

<http://www.agulin.aoyama.ac.jp/opac/repository/1000/17044/>

〔図書〕(計3件)

梅垣千尋 他、彩流社、欲ばりな女たち 近現代イギリス女性史論集、2013、19-54

梅垣千尋、白澤社、女性の権利を擁護するメアリ・ウルストンクラフトの挑戦、2011、224

梅垣千尋 他、法政大学出版局、近代イギリスを読む 文学の語りと歴史の語り、2011、113-150

6. 研究組織

(1) 研究代表者

梅垣 千尋 (UMEGAKI, Chihiro)

青山学院女子短期大学・現代教養学科・准教授

研究者番号：40413059